

# 笑の社会心理

石 瀬 秀 治

「真の喜劇詩人の思想……かくの如き光輝ある宝は、人生の砂漠における泉である。喜劇的な笑に対して敏感であることは、文化における一步である。その対象となることを避けるのは、教養における一步である。我々は人々の笑う事柄、及びその笑の響によつて、人々の洗練の程度を知るのであるが、然し同様に、もつと寛宏な性質の人は、笑う力の幅の大きさによつて識別されるということを知っている。」(デオ・ヂ・メレディス作、相良徳三訳、喜劇論、岩波文庫版、七六頁)

## 序

「人間は笑う唯一の動物である」と言う。勿論人間以外の動物のうちにも笑に類する表情を示すものがあると言われるが、然し優れた意味において真に笑う動物は矢張り人間のみと言つてよい。笑は案外に人間性や人間の社会性の一面を深く現わしているものであると思う。従来こうした笑については幾つかの含蓄ある理論がみられるのであるが、我々はこの小論ではそうした理論のうちの代表的なものを先ず簡単に吟味し、次にそれに基づいて笑の社会心理を多少分析し、更に日本の社会などに特有の特種な笑をその社会構造に結びつけながら簡単に考えてみることにしたいと思う。

註 (1) Darwin, Expression of Emotions, pp. 132-135; Sully, The Human Mind, A Text-Book of Psychology, Vol. II, p. 148; Harald Höffding, Outlines of Psychology, trans. by Mary E. Lowndes, 1896, p. 292

笑の理論のうちでここで特に興味をひく代表的なものは矢張りホッブスと

ベルグソンのものであろう。それで、先ずホッブスの理論を吟味することから始めよう。

ホッブスは、周知のように、人間社会の自然状態を「万人の万人に対する戦争状態」と規定したのであるが、その場合彼はそうした全体的な相互的猜疑不信の自然状態を実は虚栄心や競争という動機から導き出しているのである。即ち、ホッブスによれば、人間のもつ一切の欲望は「力の欲望」(Desire of Power)に還元されるのであり、死に到つてのみ休止するところの永久の「休みなき力の欲望」(a perpetual and restless desire of Power)が人間の一般的傾向なのである。そして、こうした非合理的なる力の欲望の根本動機をなすものは「己れの力が己れの競争者より優れていると考えて喜ぶ感情」であり、「征服行為に己れの力を揮うことを単に喜ぶ」感情であり、己れを他人と比較して己れの優越を感じ、且つ他人にもそれを認めさせて喜ぶたいという欲望、つまり虚栄心 (vanity) なのである。人間は己れと他人とを比較することに興味を有ち、ただ他人に優越することのみを無性に喜ぶのであり、人間の中には「自惚れの強い者もいて、能力が平等である時は勿論、実際に劣れる時でさえも優先や優越を欲する者もある」わけで、彼等は「己れを他の者よりも優れていると思ひ、己れは勝手な事を為すも可なりと自ら許し、名譽と尊敬とは己れのみに対応しく、それを要求し得るのは己れのみだと考え、……空しき名譽欲と己れの力の過大評価から他人を害せんとするに至る」のであり、「己れの安全のために必要以上に征服行為に対して力を揮うこと自体に喜びを感じる者もある」のである。人間は誰しも自己自身を尊敬し、他人が己れの如く尊敬されることを嫌う嫉妬心という感情をもつてい

るのであり、<sup>(8)</sup>人間の総ての心の喜びや悲しみは他人との比較における優劣の争いにある。<sup>(9)</sup>而も「総ての人は己れが己れ自身に与えるのと同様の評価を仲間にも要求する。そして己れを輕蔑する者に対しては凡ゆる輕蔑と見くびりの表現をもつて害を加えて高き評價を強請しようとする」のである。<sup>(10)</sup>だから又、人間性のなかには争いを惹き起す三つの主要な原因、即ち競争 Competition、不信 Diffidence、り誇 Glory がある、とも言うのである。<sup>(11)</sup>このように、ホッブスの「力の欲望」の本質は必竟対他的優越の欲望、ならびにそうした優越を他人にも承認させて喜びたいという欲望、つまり虚栄心や虚誇心であるということになる。

ホッブスは、ある箇所で、人間の持つてゐる種々の感情について説明した後で、人生を一つの競争に譬えて言う。

「努めることは欲求であり、……人々を後に見るは誇り、……前に見るは卑下、……振り返つて速力を鈍らすは虚栄であり、……前の者を追うことは羨望に等しく、押し除け、押し倒すは嫉妬である、……思わず転べば泣きたくなり、人が転ぶのを見れば笑いたくなる、……追い抜かれてばかりいるのは悲惨であり、追い抜いてばかりいるのは幸福である、而して進路を見棄てることは死ぬことである」<sup>(12)</sup>と。

このように、ホッブスは自然状態における人生を虚栄の激情に駆り立てられるところの飽くなき力の欲望の連続であると考え、そこから人間の自然状態を「万人の万人に対する戦争状態」と規定したのである。だから又ホッブスはそうした戦争状態を廃止するものとしての「自然権」の拋棄を説き、所謂「自然法」の成立を主張するのであるが、そうした「自然法」の第八条において傲慢 Contumely の禁止を説いて、「誰でも行為、言葉、顔つき、身振りによつて他人を憎悪したり、輕蔑したりしてゐると表明しないこと」、「この法の破棄は普通傲慢と呼ばれる」と述べ、更に第九条において自慢 Pride の禁止を説いて、「各人は他人を生れながら自分に平等なる者と認めること」、「この戒律の破棄は自慢である」というのである。<sup>(13)</sup>ところで、ホッブスの笑の理論は実は彼のこうした特有の人間論に基づいてゐるのである。<sup>(14)</sup>

それで、次にホッブスの笑の理論を引用することにしよう。

即ち、「突然の得意 sudden glory は笑とよばれる顔のゆがみをおこさせる情念である。それは、我々をよろこばせる我々自身のある突然の動作によつて、或は他人のうちに何か不恰好なものを認め、それとの比較から我々が突然得意になる applaud themselves ことによつて、ひき起されるのである。そしてこれは、自分自身に極めて僅かの能力しかないことを意識してゐる人々に、最もありがちなのである。そうした人々は、他人の欠陥 imperfections をみることによつて、自らを有利な立場に保たざるを得ないのである。だから、他人の欠陥 defects をみて大笑いするのは小心 pusillanimity の標徴である。何故なら、大きな心をもつてゐる人々 great minds にとつては、他人を輕蔑から救い、解放し、自分自身をただ最も有能な人とのみ比較するのが本来なすべき一つの事柄だからである」<sup>(15)</sup>と。

つまり、ホッブスにおいては、笑は、我々が他人の行動のうちに何か不恰好なものや欠陥を認めることにより、そうした他人に対して突然に優越や誇りを感じ、虚誇心や力の欲望の充足を感じる時に起るのである。「笑は誇りなり」と言えるわけである。

ところで、我々はここで先づこうしたホッブスの笑の理論の特徴について次の二つの事柄を注意しておこう。

先づ第一に、それは笑の社会性に注目し、而も笑を人間社会における上下関係という社会関係の場の中に捉へてゐることに注意せねばならない。即ち、笑は、我々人間が社会関係という場において、突然他人に対して上位や優位に立ち、そのことによつて他人に対して優越感や優位感を持つ時に起るとされるのであるから、それは笑の社会性を強調し、而も笑を社会的上下関係という場において捉へたものと言へるのである。

第二に、笑が一般に「僅かの能力しかないことを意識してゐる人々」や「小心」な人々にありがちであるという点に注意したいと思う。つまり、一般に能力の少ない人や小心な人は日常社会的に劣位に立ち、劣位感をいだいてゐるため、他人が何か不恰好な姿や欠陥を示した場合には、それを輕蔑し、嘲笑することによつて突然自分が優位に立つように感じて得意になるというので

ある。だから、逆に「大きな心をもっている人々」は自分を唯最も有能な人とのみ比較するのであるから、他人の欠陥をみて輕蔑したり、突然得意になつたりすることはなく、笑わないというのである。つまり、笑は「小心」な人々のなすことなのである。

ホッブスの笑の理論の要点は以上のようなものであるが、これは確かに人間の笑の可成りの部分を説明するものであろう。然し人間の笑の意味はこれのみに尽きるとは考えられない。

註 (1) Leviathan, Everyman's Library edition, p. 35

(2) op. cit., p. 49

(3) Elements of Law, Natural and politic, pt. I, IX,

Leviathan, p. 64

(5) op. cit., p. 88

(6) Elements of Law, pt. I, XIV,

De Cive, I,

(8) Elements of Law, pt. I, XIV,

op. cit., pt. II, VIII,

(10) Leviathan, p. 64

(11) op. cit., p. 64

(12) Elements of Law, pt. I, IX

(13) Leviathan, p. 79—80

(14) ホッブスの人間論や道徳哲学については重松俊明著「ホッブス」一六二—二四二頁に簡潔な紹介がある。

尙このホッブスの理論の萌芽は、サルリによれば、アリストテレスの滑稽についで定義、即ち「滑稽は、苦痛を伴わず、また有害ならざる、欠点や醜惡に基づく」(詩学、第五章)に見出されるといふ。(Sully, The Human Mind, A Text-Book of Psychology, Vol. II, P. 153)

次にベルグソンの笑の理論を吟味することにしよう。

ベルグソンは先ず「笑とは何を意味するか。笑を誘うものの根底には何があるか」と發問し、「笑を理解するためには、笑の本来の環境たる社会にそ

石瀬・笑の社会心理

れを置いてみる必要がある。殊に、社会的な役目という、笑の有用な役目を決定しなければならぬ。……笑は必ずや共同生活の或る要素に依じているものに違いない。笑は必ずや或る社会的意味をもっているものに違いない<sup>(1)</sup>、つまり「笑は社会的な意義と効力とをもっている」に違いないと考える。それでは、それはどんな社会的意味をもっているのであろうか。

ベルグソンにおいては、周知のように、生は「創造的進化」であり、「変化のある継続」、「反覆のない進歩」、「完全な柔軟性、常に目覚めている活動性」なのである。然るにそうした生が単なる物質や機械の状態で頽落し、特殊の放心や凝固によつて単純な機械仕掛、自動作用、つまり生のない運動を示す時に、笑が生れるというのである。次にその要点を引用することにしよう。

「生活と社会とが我々各人から要求するところのものは、現在の境地の輪廓を識別するところの絶えず気を張っている注意であり、それはまた、我々を社会と生活とに適應させることができるようにする肉体と精神との一種の弾力性である。緊張と弾力、それこそ生が發動させている互に補足し合う二つの力である。それらが肉体に甚しく欠けると、あらゆる種類の事故、虚弱、疾病などが起るのである。精神に欠けると、あらゆる度合の心理的欠陥、あらゆる程度の精神の疾患が起り、最後に性格に欠けると、悲境の源泉、時には罪惡の機会とさえなる社会生活への深刻な不適応となるのである。生存の大事に関わりあるこれらの短所がひとたび遠ざけられると、人間は楽に生活し、他の人間と共同して生活して行けるのである。……社会は相互的適應の絶えざる努力を求めるのである。だから性格なり精神なり乃至は肉体なりの凝固はすべて社会の欲しないことである。というのは、それは活動が眠っているかも知れぬ証拠であり、また活動が孤立して、社会が引きつけられているその共通的中心から外れているかも知れぬ証拠であり、要するに偏狭の証拠ということにもなるからである。しかしそれにも拘らず社会はそのために具体的に損害を受けているのではないから、この際、具体的な圧迫によつて干渉するわけにはいかない。社会は自分に不安を感じしめる或る物に直面してはいるが、しかしそれもただ徴候としてだけのことで、殆ど一つの脅威と

もいぬもの、精々一つの態度である。だからして社会がそれに呼応するにも、一つの態度を以てするのだ。笑はこの種の或る物、一種の社会的態度であるに相違ない。それが吹き込む恐怖の念によつて、笑は偏狭になつてゐるのを矯め抑える。……要するに、社会団体の表面に機械的な凝固として止つていようなものを悉く柔軟にするのだ。笑は、だから、純粹美学に属するものではない。なぜなら、笑は（無意識的に、しかも多くの場合には不道德にも）全体的完成という実目的を追及しているから。……若し個人なり社会なりの生活を危くし、且つその自然の成行によつて自ら罰せられる行動や性向を中心としてその周囲に圈を画くと、この情緒と闘争との地域のそこに、人が人に対して単に観察される立場となつてゐる中立地帯の中に、肉体、精神、及び性格の或る種の凝固が居のこるが、このものを社会はその成員たちにできるだけ大きい弾力性と高い社交性とを獲得させるためになおも除去したのである。この凝固が滑稽なのであり、そして笑はその懲罰なのである。」

つまり、笑は「注意深い柔軟性と生きた屈伸性とがあつて欲しいところに、一種の機械的の凝固がある」時、あるいは「生命の機械化」、「社会に対する人間のある特殊の不適應」、「他人の欠点、特に非社交性」、「放心」などがある時に起るのであり、笑はそれらを矯正しようとするものなのである。<sup>9</sup>「笑は一種の凝固による、個人的、或は社会的な不完全性を矯正するものである。笑は特殊な放心を指摘し、それを阻止するところの一種の社会的態度である」。<sup>10</sup>「社会の各成員はいつちも自分の周囲に注意し、周囲に陥つて自分を型どらねばならぬものである。そして社会は各成員の上に矯正の脅迫とまで行かないでも、少くとも屈辱の見せしめを示すのである。その屈辱は、たとい輕微であつても、怖ろしいものである。笑の役目はかくの如きものであるに相違ない。笑はその対象となる者にとつては常にいくらかの屈辱を与えるものであつて、それは一種の社会的制裁なのである」。<sup>11</sup>その意味において「笑は習俗に懲戒を与えるものなのである」<sup>12</sup>。或は「笑の主要な任務の一つは放心してゐる自己愛を十分自覺の境地に引き戻し、出来るだけ最大の社交性を獲

得させる」ことにあり、だから「虚栄心の特効薬は笑であり、本質的に笑うべき欠点は虚栄心であるといえる」のである。<sup>13</sup>「笑は正しくすべての分離派的傾向を抑制することを任務としてゐる。その役目は凝固を矯正して柔軟にすることであり、個人を公衆に適応させ、圭角をなくして円滑にすることである」。<sup>14</sup>つまり笑は「一つの矯正手段」なのであり、「社会に対する無作法に対して社会は笑をもつてやり返すのである。その笑たるや更にはげしい無作法なのである。だから、笑は慈悲を何らもつていないであらう。むしろそれは惡に報いるに惡をもつてするものであらう」。<sup>15</sup>「笑は何よりも先ず矯正である。屈辱を与えるためにできてゐる笑は、笑の的となる者に苦痛の印象を与えねばならぬ。社会は笑によつて人が社会に対して振舞つた自由行動に復讐するのだ。笑が若し同情と慈悲心をもつていたら、その目的を遂げることはないであらう。……一般に笑は疑いもなく有益な職務を果している。……とは言ふものの、笑がいつも正しいものであるといふことにはならぬし、またそれが親切または公平なるものをもつてゐるとは言えない。……笑は、恰も病気が人の過度を処罰するように、人の欠点を処罰するのである。……それは屈辱を与えて恐縮させることを職務としてゐる。若し自然が人々の中の最良のものにも多少人の悪いところ、或は少くとも惡意をこのために遺しておかなかつたら、笑はその職務に成功しなかつたであらう。恐らく我々はこの点をあまり深く追究しない方がよいであらう。我々にとつて大いに鼻を高くしていいやうな何物もそこには見出さないであらう。そこにある弛緩或は膨張の運動が笑の序曲に過ぎないものであり、笑う人は直ちに自分の中に立戻り、多少倨傲の心をもつて自己肯定をし、そして他人を恰も自分が糸を引いてゐる操人形のように見做す傾向のあることを知るであらう。それに、この自惚れの中に我々は直ちに少量の利己心のあることを識別し、その利己心そのものの背後に何かもつと自発的でない、もつと苦々しいもの、笑い手が自分の笑に更に理由をつければつけるほど、いよいよ動かし難いものになつてくる何か一種の萌芽的悲觀を識別するであらう。……笑は陽気なものである。しかし、それを味う目的で採集する哲学者は、少量にも拘らず、時とし

て一抹の苦味を見出すであらう。<sup>(13)</sup>

これだけの引用で既に明らかなように、ベルグソンにおいては、笑は、生が本来反覆のない進歩であり、常に目覚めている活動であるに拘わらず、それが機械化し、凝固し、放心することにより、人間が社会生活からの逸脱や社会生活に対する不適応や非社交性などを示す時、それを矯正するために起るといふのである。

ところで、我々はここでも又先ずこうしたベルグソンの笑の理論の特徴について次の二つの事柄を注意しておこう。

先ず第一に、それは、ホッブスの理論と同様に、笑の社会性を主張し、笑の社会的な意義や効力を強調していることに注意せねばならない。即ち笑を社会と個人との関係という場のうちに捉えているのである。つまり個人が社会の統制を逸脱し、社会的不適応を示す場合に、社会がそうした個人を再び社会に適応させ、同化させるために用いる一種の矯正、懲罰、制裁の手段が笑なのである。笑を社会の個人に対する一種の統制作用とみるのであるから、これは優れて笑の社会性を強調するものと言わねばならない。

第二に、それは、成程笑の社会性を主張して、笑を社会と個人との関係という場のうちに捉えているのではあるが、然しそうした場において笑を個人に対する社会の一種の統制作用とみるのは、笑を言わば社会から個人への方向においてのみ捉え、「社会より個人へ」の笑としてのみ考えるものであり、従つて言わば個人から社会への方向における笑、「個人より社会へ」の笑を説くものでないことに注意せねばならない。それが何を意味するかは後に取扱わねばならない問題なのである。

註 (1) ベルグソン著、林達夫訳、「笑」、岩波文庫、一一、一七頁。尚ベルグソンのこの著書には広瀬哲士氏の優れた訳「笑の哲学」もあるが、こゝでは便宜上上記のものを利用することにする。

- (2) 同訳書、一三〇—一三二頁
- (3) 同訳書、五五、九〇、一〇二頁
- (4) 同訳書、八九頁
- (5) 同訳書、二六—二九頁

石瀬・笑の社会心理

- (6) 同訳書、一九、一〇二、一二八、一三一、一三六、一四二—一四三
- 一四四頁

- (7) 同訳書、八九頁

- (8) 同訳書、一三二—一三三頁

- (9) 同訳書、二五—二六頁

- (10) 同訳書、一六九頁

- (11) 同訳書、一七一—一七二頁

- (12) 同訳書、一八六—一八七頁

- (13) 同訳書一八九—一九三頁

- (14) 大道安次郎、笑の社会学、社会学評論、第三号、一〇七—一〇八頁

## 二

我々は前の節でホッブスとベルグソンの笑の理論の要点を簡単に述べてみたのであるが、ここではそれらを更に吟味し、参照しながら、笑の社会心理を多少分析することになしようと思う。然し我々はこの笑の一覧表のようなものを作ろうとするのではないのであつて、ただ笑の社会心理として顕著な一般的特徴だけを分析してみようと思うのである。

笑は学習せなくても出来る行動であると言われる。<sup>(1)</sup>赤子は成程生れると共に笑うということはしないが、然し間もなく微笑するようになり、数ヶ月後には笑うようになる。こうした時期の笑は確かに赤子の快適な上機嫌 *good spirits* (*euphoria*) から生ずるものであろう。そしてそうした上機嫌に基づく笑は大人においても多少はみられるものであり、従つてそうした快適な状態の個人心理的表現としての笑は人間一般に広くみられる普遍的現象であると言えよう。然しここではこうした個人心理学的な笑の領域には触れないことにしよう。笑は、元来人間が成長するに従い、益々一層社会的文化的な刺激によつて惹き起され、影響されるものであり、何を見て笑うかは学習によるものなのであるから、そうした何よりも社会的文化的な刺激によつて惹き起され、優れて社会的な性格をもつた笑を特に考えることにしよう。病理学上や精神病上のいろいろの笑もここでは異常現象として取扱わないことにしよう。

う。

それで、笑の社会性を強調したものととして、矢張り先ずホッブスの理論から吟味していくことにしよう。ホッブスにおいては、前の節でみたように、笑は、我々が他人の行動のうちに何か不恰好なものや欠陥を認めることにより、そうした他人に対し突然に優越や誇りを感じ、虚誇心や力の欲望の充足を感じる場合に生ずるのであった。これは笑を人間社会における上下関係という社会関係の場において捉え、笑をそうした場において虚誇心や優越感に基づいて生ずるものとするのであるから、たしかに笑の社会性や社会心理を鋭く説いたものと言わねばなるまい。元来優越欲や支配欲などは極めて広くみられるものであり、マクドゥガルが得意の感情を伴う自己主張本能と言い、トーマスなどが社会的認知を求める欲求と呼び、更にはラッセルが権力衝動として特徴づけた、一つの根強い人間の性向なのである。こうした優越欲、支配欲、権力欲などと呼ばれるものが社会関係の場において多くの場合にその充足拡大を望んでいるのであるが、そうした場合に我々が突然他人の欠陥を発見することにより、我々は屢々他人に対し優越感や優位感をいだき、他人に対して支配的な優位や上位に立つのを感じるのである。ホッブスにおいては、笑はそうした突然の優越感の表現なのである。笑う者は、他人の欠陥を認めることにより、突然自己の優越感を満足させ、優位を主張し、笑われる者は自己の欠陥を恥じ、屈辱を感じ、突然劣位に陥るのを感じるわけである。そして、そうした場合には、優越感を感じるものの側においては緊張の解除 *release of tension* ということも起るであろう。スペンサーが笑を過剰エネルギー *excess energy* が最も動き易い顔筋や発声器官に流れ出ることによつて生ずると述べているのも、そうした側面を説いたものである。又クワイルが、笑は重大な目的のために動員されたエネルギーが解除されて起る有機的反応であるというのも、同様であろう。更にはカントの「笑は緊張した期待が突然無に変ずる *Verwandlung einer gespannten Erwartung in nichts* とくに起る一情緒である」とか、リップスの「滑稽感とはそれ自身又は吾々にとつて意義のあるもの又は印象の深いものが吾々にと

つて或は吾々の心中においてその意義と印象の力を失う場合に生ずる」というのも、ほぼ同様のものであろう。尚シュローベンハウエルは、笑は抽象的な思想と實際上の事実、概念と実体との矛盾 *Inkongruenz zwischen einem Begriff und der realen Objekten* が突然認められた時に生ずるのであり、笑はそうした矛盾の表現であるというのであるが、これはカントやリップスの説明に通ずるものをもつていっているわけであるが、然し又そうした矛盾や不調和をみて笑うのは矢張り、意識するにしろ、しないにしろ、優越感に基づくことなのである。何れにしても笑を社会関係の場における優越感に基づくものとし、突然の優越感の表現であると考えるのは、充分な根拠のあることと思う。ベルグソンも笑の心理の背後に虚栄心、自己肯定、自惚、利己心などのあることを指摘しているのは注意すべきであらう。ホッブスと共に、多くの人達が笑を何より先ずそうした優越感や権力欲や自己主張などから説く所以であらう。周知のように、近代の資本主義的市民社会は自由競争を一つの根本原理とし、生活の凡ゆる領域において競争、闘争、個人の階級間における移動周流をまき起しているわけであるが、そうした状況においてはこうした優越欲や権力欲に基づく笑の領域は極めて広いと言わねばなるまい。ホッブスの笑の理論は確かに高く評価されてよいのである。

然し我々はホッブスの突然の優越の表現という笑の理論の全部に賛成することは出来ないと思う。先ず優越の表現としての笑といつても、それは常に突然にのみ起るものとは言えない。元来上下関係、あるいは支配服従の関係においては、支配者がその社会における物質的精神的価値を占有し、被支配者をそうした価値から出来る丈隔離するためにいろいろの方法を發明してきたものであり、又そうした支配的優位を確立誇示するためにいろいろの手段を用いるのであるが、そうした手段の一つとして支配的優位者に特有の身振りや態度としての笑を挙げることが出来よう。それは服従者を常に見下すような意味をふくんだ笑であり、而もそれが一つの身振りや態度にまでなつた笑である。だから、こうした支配的優位者の常時の身振りや態度にまでなつた笑は決して突然の優越の表現のみに尽きるものではない。又そうした支配

的優位者は、自己の欠陥を指摘された場合にも、従つて事実上突然劣位に落ち込むのを感じることがあつても、それでも尙優位を維持できるものと自信し、何時もの態度としての笑で依然として優位を主張し、或は劣位を隠蔽しようとするのである。また、前にも指摘したような、赤子の笑や精神病者の笑や更には擧りによる笑などは決して突然の優越の表現とは言えないわけであり、のみならず、他人の欠陥や劣位性を認めることが決して笑を惹き起さないで、寧ろ憐憫や嫌悪や恐怖さえも惹き起す場合があり、更には笑が激しい悲歎を現わすことさえあるわけである。然し更に注意すべきことは、ホッブスのいう突然の優位の表現としての笑が、前の節で指摘しておいたように、一般に僅かの能力しかないことを意識している人々や「小心な人々」にありがちな笑であるという点である。即ち、ホッブスによれば、一般に能力の少ない人や小心な人は普通社会的に劣位にあり、劣位感をいだいてゐるため、他人が何か欠陥を示した場合には、突然自分が優位に立つように感じて得意になるのである。だから、「大きな心をもっている人々」は自分をただ最も有能な人とのみ比較するのであつて、他人の欠陥をみて突然得意になつたりすることはなく、笑わないというのである。然し果して笑は「小心」な人々のみのすることであらうか。「大きな心をもつた人々」は笑わないのであるうか。我々はそうは思わない。「大きな心をもっている人々」も笑うと思う。尙又笑はホッブスが説く以上の社会的な意味や機能をも持つてゐるのである。ホッブスの理論はそうした種類の笑を充分説明することが出来ないのである。

- 註
- (1) R. S. Woodworth, Psychology, 1932, P. 257: Dynamic Psychology, 1918, P. 80; O. Klineberg, Social Psychology, 1950, P. 189
  - (2) Woodworth, Psychology, 1932, P. 257: Klineberg, Social Psychology, P. 193: 宮城音弥著「心理学入門」二二五—二二二頁
  - (3) Klineberg, Social Psychology, P. 176, 189
  - (4) K. Young, Handbook of Social Psychology, 1951, P. 90: Woodworth, Dynamic Psychology, 1918, P. 80

石瀬・笑の社会心理

- (5) H. Höffding, Outlines of Psychology, trans. by M. E. Lowndes, 1896, pp. 290—291
- (6) 丸山真男「支配と服従」弘文堂刊行「社会科学講座」一九七—二〇四頁
- (7) Young, Handbook of Social Psychology, 1951, P. 91: T. R. Angell, Psychology, 1905, P. 333
- (8) Spencer, The Physiology of Laughter, Essays, 2 vols., 1863
- (9) Young, Handbook of Social Psychology, 1951, P. 91
- (10) Kant, Kritik der Urteilskraft, § 54
- (11) 成瀬無極著「笑の研究」二四—一頁
- (12) Schopenhauer, Die Welt als Wille und Vorstellung, § 13
- (13) Young, Handbook of Social Psychology, 1951 P. 91: Klineberg, Social Psychology, 1950, P. 189: 成瀬無極著「笑の研究」一一頁
- (14) Young, Handbook of Social Psychology, 1951, P. 91: G. H. Mead, Mind, Self and Society, 1950, PP. 206—207: ユルセル・パニョル著、鈴木力衛訳、笑について、三二—一〇五—一〇六頁、デカルト著、伊吹武彦訳、情念論、一三二—一頁
- (15) Woodworth, Dynamic Psychology, 1918, P. 80: ユルセル・パニョル著、鈴木力衛訳、笑について、九八—一〇五—一一三頁
- (16) "Our sincerest laughter  
With some Pain is fraught" (Angell, Psychology, 1905, PP. 332—333)

次にベルグソンの理論を吟味することにしよう。ベルグソンにおいては、生は本来反覆のない進歩であり、常に目覚めている活動であるに拘わらず、それが機械化し、凝固し、放心することにより、人間が社会生活からの逸脱や社会生活に対する不適応や非社交性などを示す時、それを矯正するために起るといふのであつた。つまり、ベルグソンは笑を社会と個人との関係という場において捉え、個人が社会の統制を逸脱し、社会的不適応を示す場合に、社会がそうした個人を再び社会に適応させ、同化させるために用いる一種の矯正、懲罰、制裁の手段が笑であるといふのである。これは、前の節で指摘しておいたように、明らかに笑の社会性を主張し、笑の社会的な意義や



効力を強調しているものと言わねばならない。前のホッブスも笑を社会的上下関係という場において捉えているのであるから、ホッブスも確かに笑の社会性に注目しているわけであるが、然しホッブスの場合においては尙「力の欲望」とか「優越感」が出発点になつていて、それ丈に未だ笑の充分な社会的意味を明らかにすることが出来なかつたのである。それに對し、ベルグソンは最初から笑の社会的な意味や機能に注目しているため、笑を一種の社会統制の機能をもつものとして捉えることが出来たのである。これは確かに笑のもつ一面の社会的意味を鋭く捉えたものと言つてよい。

元来如何なる社会もその所属成員をその社会の文化様式や行為様式に同化適應するように誘導拘束するものである。デュルケムが社会の本質を個人に對する外からの強制として規定した所以であらう。そうした個人に對する社会の統制機能を果すものとしては法律や道德などのみならず、笑も確かに挙げ得るのである。

ところで、一般に狭小な封鎖的社会においては、各成員の接交渉は熟知的な面接関係となり、又その生活は古くからの仕来りに従うところから、その文化様式や行為様式は強い拘束力や統制力をもつものとなり易いのである。だから、そうした社会において、個人が社会の文化様式や行為様式から逸脱し、それに背反するということは比較的少いのであるが、然し若し個人が社会の文化様式や行為様式から逸脱し、それに背反する場合には、その程度に應じて、或は法律や道德や慣習によつて制裁され、或は笑によつて非難排斥されることになるのである。そして、そうした場合における笑による非難排斥は、狭小な封鎖社会における熟知的面接関係においては、極めて強い圧迫迫害となるのである。實際、多くの人達が指摘しているように、特に未開社会などにおいては、嘲笑は広汎に社会統制や社会的矯正の手段として用いられたのである。即ち、嘲笑は劣等感や羞恥心を惹き起し、不道德な行為を妨止することが出来たのであり、従つて激しい社会的威圧の形式たり得たのである。<sup>(2)</sup> ウィスラーによれば、特にアメリカ土人においては、大抵の犯罪は唯大笑や嘲笑によつてのみ罰せられるのが普通であつた。<sup>(3)</sup> 又エスキモー人に

においても同様であるという。<sup>(4)</sup> その結果、極端な場合には集団からの放逐追放となるのである。勿論、前にも述べたように、これは、各人が熟知的な面接関係にある狭小な集団における程、しかも他の社会集団への逃亡が不可能な程、顯著であつたわけである。だから、つまり、笑は社会統制や社会的矯正の手段として働き、個人が社会の行為様式から逸脱し、それに背反することを有効に妨止することが出来るのである。わが国の封建社会においても、例えば借銀の証文に万が一返済滞りにおいては、「人中にて御笑い下さるべく候」とあつたり、又軍記物語に、「笑れぬこそ後代の恥と覚ゆれ」とか、「日本国の武士共に笑れん事こそ口惜けれ」というのも、笑われまいとする体面意識や面子意識に基づくものに外ならないのである。そしてこの事は、程度の差こそあれ、近代や現代の社会においてもみられるものであることは言うまでもない。

ところで、こうした社会的矯正の手段としての笑は、客観的にみれば確かに社会統制という機能をもっているわけであるが、然し同時に主観的にみれば、ホッブスの言うような、又ベルグソン自身も認めているような、個人的な優越や攻撃という意味をも含んでいるわけである。<sup>(5)</sup> つまり、社会の伝統的一般的な文化様式や行為様式から逸脱し、それに背反する個人に對して加えられる笑においては、笑う個人は客観的にはその社会の大なる統制力を背後にしながら、同時に主観的には自己の優越感や攻撃欲に基づいて笑うのである。笑われる個人は主観的には笑う個人に對する劣等感や屈辱感を感じると共に、同時に客観的にはその背後に社会の大なる統制力の威圧を感じざるを得ないのである。そして、社会と個人とが比較的に融即している社会や時代においては、そうした笑の客観面と主観面が可成り一つのものに融合して現われるのであるが、然し社会と個人とが對立的に分化對立するに従つて、それらの二面も二つの領域をもつものとして意識されてくるわけである。そして、社会と個人とが一応ある程度對立的に分化對立しながらも、尙個人が比較的社会に圧倒されていて、個人意識の發達が不十分な場合には、ある個人の逸脱行為や背反行為を笑うとしても、その笑は、或はいたづらに社会の權威



を借りたものとなり、或は社会の権威を背後にしてその実いたづらに自己の優越欲や攻撃欲の満足に向つたものになつたりするのである。そうした笑は、個人が何所までも未だ社会に包摂吸収されているため、社会がその文化様式や行為様式を対自的に検討し、批判し、修正し、改革しようとする対社会的行為を妨止し、矯正し、統制しようとする段階にみられるものに外ならない。その意味で、そうした笑は矢張り言わば社会から個人への方向においてのみ見られる笑であり、「社会より個人へ」の笑であると言つてよい。ベルグソンの理論は確かに笑の一つの社会的な意味や機能を明確に分析したものには違いないが、にも拘らず、それは明らかに「社会より個人へ」の笑の説明に傾くものと言わねばなるまい。<sup>(9)</sup> 一体、然し笑は、ベルグソンの言うような、「社会から個人へ向う笑」、あるいは「社会より個人へ」の笑に尽きるのであるうか。またホッブスの言うように、笑は「小心」な人々のみならずことであつて、「大きな心をもつた人々」は笑わないのであらうか。次にそうした問題を考へてみることにしよう。

註 (1) キュヴィリエ著、清水義弘訳、社会学入門、八三頁、棚瀬襄爾著、文化人類学、一五四頁

- (2) Young, Handbook of Social Psychology, 1951, P. 92; Klineberg, Social Psychology, 1950, PP. 191—192, 543—544
- (3) Klineberg, Social Psychology 1950, P. 192
- (4) *ibid.*, P. 543
- (5) *ibid.*, P. 544
- (6) 桜井庄太郎著、日本封建社会意識論、八三頁
- (7) 源平盛衰記、卷第十五、宇治合戦
- (8) 太平記、卷第三十四、平石城軍事
- (9) Young, Handbook of Social Psychology, 1951, P. 92
- (10) 成瀬無極著、笑の研究、二四頁

そうした問題を考えるにあたり、先ず次のゲーテの言葉を吟味してみることから始めよう。ゲーテは「官能的人物は屢々笑うべきことなきに笑い、知的人物は殆んど万事を笑ひ、理性的人物は殆ど笑ふことなし」、「最も賢明な

石瀬・笑の社会心理

るものは常に微笑す」という。つまり、官能的人物の笑は官能の快感から来る反射的の低級な笑であり、知的人物の笑は例の優越欲や権力欲から来る利己的な笑であるに對し、理性的人物はそうした類の笑をすることなく、たとい悟性によつて特定個人の欠陥や矛盾を認めても、他方に人生の深い理解から生ずる温かい同情や愛情があるので、それを嘲笑することが出来ないわけである。然しそうした最も賢明なる人には一種独特の微笑、慈悲の微笑や解脱の微笑があるわけである。ホッブスも指摘していたように、優越の表現としての笑は「小心」な人々のなす笑なのであつて、「大きな心をもつた人々」はそうした利己的な低級な笑はせないのである。然しホッブスは「大きな心をもつてゐる人々」は自分を唯最も有能な人とのみ比較するのであるから、他人の欠陥をみて得意になつて笑うというようなことはしないといふのであるが、然し人間が何所までも自他の比較や上下関係という立場に立つかぎり、例え比較の相手が最も有能な人であつても、その欠陥をみて優越感の満足としての笑をわろうことから脱することは出来ないであらう。だから、「大きな心をもつてゐる人々」が笑わないのは、そうした人々が人生の深い理解に達し、他人の欠陥や失敗などを温かい同情や愛情をもつて寛容し、自他と共に尙一味同等と感ずることができるような心術をもつからなのである。何れにしても、そうした賢明な大きな心をもつた人の笑は他人にただ屈辱を与えて満足するような低級な優越感の表現としての笑ではなくして、寧ろ人々を鼓舞激励するような高邁な笑となつてくるであらう。更にはそうした「大きな心をもつた人々」は単なる優越感からではなしに、言わば正義感などからして、他人の許せない欠陥や失敗、あるいは更に社会の許せない欠陥や矛盾を笑ふことによつて、それ等を改善改革しようとするであらう。だから、そうした人々は高らかな正義感に基づく、然しいくらかの悲壯を含んだ、高潔な笑をも知つてゐるであらう。ホッブスの笑の理論においてはこうした類の笑が説かれていないのである。

又ベルグソンの笑は「社会より個人へ」の笑に止つていたのであるが、然し笑には逆に「個人より社会へ」の笑もあるわけである。ベルグソンにおい

ては、笑は、個人が社会の統制を逸脱し、社会的不適応を示す場合に、社会がそうした個人を再び社会に適応させ、同化させるために用いる一種の矯正、懲罰、制裁の手段なのであつた。我々も勿論そうした類の笑が広くみられることを認めざるを得ない。然しながら逆に社会そのものが言わば「創造的進化」を忘れて凝固し、朽果てた文化的伝統のうちに停滞することがあるわけであるが、そうした場合に個人は、高い正義感や社会愛や人類愛から、そうした社会構造やその文化様式を批判し、嘲笑するということもあり得るわけである。モリエールの喜劇やチャップリンの喜劇映画などにみられる笑を考へてみるべきであらう。そうした笑は「個人から社会へ向う笑」、あるいは「個人より社会への笑」なのである。そして、この個人から社会へ向う笑は、社会から個人へ向う笑の場合とは違つて、何所までも社会の一般的な統制的権威を背景にせず、寧ろそれに対抗しながら、個人の充分な自覚や識見や責任や勇氣においてなされるものであり、又単なる利己心や優越欲に基づくものでないことが注意されるべきであらう。又こうした笑は、個人意識が発達する程、顕著になるものであること、尙そうした笑をもち得るような人々によつてのみ社会の進歩が押し進められるものであることは言うまでもないであらう。ベルグソンの笑の理論にはこうした個人から社会へ向う笑が明らかにされていないのである。

何れにしても真に「大きな心をもつた人々の笑」や「個人から社会へ向う笑」は、だから、何事にでも笑うような人には感得し得ないのであつて、「ほんとの諧謔と、ほんとの機智は、健全にして博大な心を必要とする。かくの如き心は、常に壮重なものである」と言われるのである。アランが、「大喜劇においては、……世間並の道德は如何にも台無しになるが、真の倫理が舞台を照らす」のであつて、「大喜劇は……高いところを目ざしている。アリストファネスが舞台に上せたのは正にソクラテスの精神であつた」という所以であらう。ユーモリストは、だから、モラリストなのである。メレディスは言う、「一國文化の立派な審査は、喜劇的観念と喜劇の隆盛であると思う。そして又、真の喜劇の審査は、それが思慮深い笑いを惹き起こすという事であ

る」と。ベルグソンもまた、「喜劇的構想はまさに生きたエネルギーである。社会的土壌の確かな部分に逞しくも生え出た奇異な植物、栽培によつては芸術中の最も洗練された作物に匹敵できるようになるのを待つている植物である」という。現代社会がこうした「大きな心をもつた人々の笑」や「個人から社会へ向う笑」を特に必要としていることは、どれ程強調されても、強調しすぎることはない筈である。

我々は、この節で、ホップスとベルグソンの笑の理論を批判しながら、笑の社会心理を多少分析してきたのであるが、免に角、笑には實際低級なものから高級なものにわたつていろいろの種類や段階が分けられると思う。然し何れにしても、「何を笑うかによつて、その人の人柄がわかる」のであり、まことに人々の笑う事柄、及びその笑いの響きによつて、その人々の文化的社会的な洗練の程度を知ることが出来るのである。

註 (1) 成瀬無極著、笑の研究、二四頁

(2) 同書、二四頁、「ベルグソンは私の考へている「諷刺」「譏諷」に当る種類の笑のみを認めて、所謂「有情滑稽」(ユーモア)の方面は閑却しているように思われる」と。之はホップスにも妥当する批判であらう。尙大道安次郎、笑の社会学、社会学評論、第三号、一〇七—一〇八頁参照。

(3) ゴーデ・メレディス作、相良徳三訳、喜劇論、一一、三三頁

(4) 桑原武夫訳、アラン芸術論、二六—二六三、四七—四九頁

(5) ゴーデ・メレディス作、相良徳三訳、喜劇論、七二頁

(6) ベルグソン著、林達夫訳、六九頁

(7) 笑の理論についてはホップスやベルグソン以外についてもいくつか資料を集めてみたが、こゝでは一切割愛することにした。

(8) マルセル・パニョル著、鈴木力衛訳、笑いについて、一〇、九頁

### 三

我々は、今まで、ホップスとベルグソンの笑の理論を吟味しながら、笑の社会心理を多少分析してきたのであるが、最後にここで更に日本の社会などに固有の特種な笑の意味をその社会構造に結びつけながら簡単に考へてみる

ことにしたいと思う。

日本の社会は従来一般に狭小にして封鎖的な農村型の社会構造を基礎にできたものであるが、それだけに、第二節で述べたように、笑が広汎に社会統制の手段として作用してきたと言えるのである。柳田国男氏によれば、「笑は原始の形では村の生活の重要な基礎になつて居たと思われる。笑止とか恥辱とかいう觀念が、日本に於て殊に發達して居ることは、軽々と見過すわけには行かないのであり」、「相手の弱点を突いて相手を嘲笑する類の諺が日本には実に多い」という。こうした類の笑は明かに「社会から個人に向う笑」や優越感の表現としての笑に外ならないのであるが、日本においてはこうした笑が今日においても、農村型社会構造の存続と共に、依然として広汎にみられることは言うまでもない。そして、そうした日本人の「社会から個人へ向う笑」は、個人意識の未發達のために、個人の充分な自覚や責任や勇氣に基づかずして、唯安易に社会の權威を背景にしてなされるということが特に顯著なのである。こうした笑が日本の近代化と共に減少していくべき筈のものであることは言うまでもないであらう。

然しながら、日本人に特有の笑として注目さるべき笑はそうした類の笑ではなくして、日本の封建制度の結果出来上つている特種の笑や微笑<sup>ミウ</sup>である。西欧の封建制度における主従關係が多分に契約的な双務關係という性格をもっているに對し、日本の封建制度における主従關係は多分に上位者に対する奉公や犠牲を一方的に偏重するという性格をもつ事は、屢々指摘されるところである。ところで、主従關係、親子關係、夫婦關係などの、凡ゆる社会關係において、上位者に対する奉公や犠牲を偏重した日本の封建社会は、やがて上位者に対しては多くの場合に服従や恭順の表現として適度の微笑を示すことを下位者に要求するようになり、遂にはそうした意味の微笑が日本人の表情の一つになり切つたのである。下位者が、例い非難叱責されても、拗ねてはならず、反對に實際快適であることを示すべきものである事を始めて要求したのは徳川家康である、という。このようにして、やがて、下位者が上位者の面前で悲歎や心痛の情を示すことは無礼なのであり、拗ねた服従や

受動的な服従は無礼な攻撃を示すのであつて、正しい服従は心よい微笑や物やわらかな氣持のよい音声を伴うべきものとされたのである。だから、逆に又下位者が自分の身に振りかかった不幸をその上位者に伝える場合、上位者が微笑するのが下位者に対する正当な表情とされたのである。つまり、ここでは上位者へのみ例の優越感の表現としての笑が許されているのであつて、逆に下位者の微笑は自己の不幸を上位者にとつてとるにたらぬものと見做せうとすると同時に、そうした不幸にも拘らず上位者に対する獻身と恭順を喜ぼうとする態度の表明なのである。そしてこうしたややこしい笑の意味は西欧人には理解できないのである。外国人には日本人は不真面目で、輕薄にみえ、日本人には外国人の顔は怒っているようにみえるのである。ラフカディオ・ハーンは「日本人の微笑」のなかで、そうした日本人特有の微笑についていくつもの例を挙げている。その一例を引用しよう。『私(外国婦人)の日本人の乳母が先日何か大変面白い事でもあつたようににこしながら私の所へ来て、夫が死んで葬式に行きたいから許してくれと言つて来ました。……晩になつて歸つて来て、遺骨の入つた瓶を見せました。……そして「これが私の夫ですよ」と言いました。そしてそう言つた時實際聲を上げて笑いました。こんな厭な人間をあなた聞いた事ありますか。……「たとい胸の張り裂ける場合でも、勇敢に微笑するのは社会的義務である」、……「その笑は克己の極端まで進んだ礼儀である」と。まことに、それは日本の封建社会が、念入りに長い間かかつて養成してきた、長上に対する従者の克己の礼法なのである。

元来上代の日本人は極めて單純素朴にして朗かな笑を知つていたのであつた。それがやがて封建時代に入るに従つて、その特異な上下關係、あるいは支配服従の關係に基づいて、特種な「日本封建社会式微笑」を顯著ならしめてきたのであつた。のみならず、日本の封建社会は同時にたくさんさんの封建制度に基づく涙をも製造してきたのであつた。そしてそうした「日本封建社会式微笑」と「日本封建社会式涙」とは今日と雖も依然として広汎に根強く存続しているのである。而も日本の多くの文学やマス・コミュニケーションなど

は依然としてそうした程度の笑と涙を、その営利主義のために、宣伝し、製作している有様なのである。将来こうした筋道から例のファッショズムが再び擡頭するということがならねば幸運であろう。兎に角、日本の社会の前近代性はこうした面からも明確に読みとれるのであつて、今日日本の近代化にとつて必要な一つのことはそうした前近代的封建制度の絶滅、従つてそれに結びついた低級卑屈な微笑の克服、即ち例の「大きな心をもつた人々の笑」、「個人から社会へ向う笑」、人を侮辱するのではなく、鼓舞激励するような高い倫理性に結びついた笑、慈悲解脱の微笑、生活と労働に歓喜し、相共に親和し得るような邪気のない高邁な笑、個人と社会との高らかな調和を讃美するような笑などを創造することにあると言えるであろう。

註 (1) 柳田国男著、民間伝承論、一九九—二〇〇、二八七頁、日本人、八、一五八頁

- (2) そうした特種な微笑の外に、社会的挨拶の役割りをもつ微笑のあることは言うまでもない。(Klineberg, Social Psychology, 1950, P. 194.) 宮城音弥著、心理学入門、一一五頁
- (3) Klineberg, Social Psychology, 1950, pp. 195—196
- (4) *ibid.*, P. 194
- (5) 小泉八雲、日本人の微笑、現代日本文学全集、改造社版、一〇三頁
- (6) 同書、一〇四、一〇六頁
- (7) 麻生磯次著、笑の研究、一一七—一五四頁、笑の変遷、東京大学公開講座、第二集、八一—九頁
- (8) この小論の説明は全般に粗く、細かい説明を省略したが、紙数の都合上止むを得なかつた。